

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25285150

研究課題名(和文) ケア実践に関わる死生観の地域的・文化的多様性に関する複合的研究

研究課題名(英文) Combined research on regional and cultural diversity of attitudes toward death and dying in the context of hospice care

研究代表者

諸岡 了介 (Morooka, Ryosuke)

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：90466516

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトでは、ケア実践との関連において現代日本における死生観の実態を明らかにすべく、各種の質的調査や、思想史的・宗教史的考察、海外事情の研究といった分担研究を集約しながら、在宅ホスピスを利用した患者遺族を対象とした大規模な調査票調査を実施した。

調査票調査では、宮城県・福島県における在宅ホスピス診療所6カ所の利用者2223名に依頼状を送付して、663名の回答が得られた。その分析から、在宅療養時の患者や家族の不安感やニーズの詳細とともに、宗教的関心に経済的・社会的関心が絡み合った死生観の具体相が明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：In the research project, we conduct a questionnaire survey of bereaved people who had cared for a family member until their death while receiving home hospice care service. The questionnaire is designed on the base of preliminary studies including fieldwork, historical examination, and international comparison on this topic.

In the survey, responses from a total of 663 people were collected. The analysis reveals details of the anxiety and needs patients and their family have, as well as mixture of religious, economic, and social interest in their attitudes toward life and death.

研究分野：宗教社会学

キーワード：死生観 在宅ホスピス ホスピスケア

1. 研究開始当初の背景

日本人の死生観に関しては従来少なからぬ研究が重ねられてきたし、近年では新たな「死生学」の試みも現れてきている。しかしながら、「死」が病院へと囲い込まれていることとも平行して、現在の死生観研究は生と死の現場に応じたものとはなっていない。

例えば、思想史や民俗学における研究蓄積の主題は、霊魂・世界観と葬送儀礼に著しく偏っており、現在における人間の死生の実態に迫ったものは意外なほどに乏しい。他方、近年における「死生学」においては、死の文化面についての研究と、ケア実践を意識した研究が別々に存している傾向にある。

こうした状況を意識して本共同研究は、研究実践上において「死」の病院への囲い込みを乗り越えながら、死生の現場の実態と問題に即した死生観研究を目ざした。

2. 研究の目的

本共同研究は、「死」の病院への囲い込みによって実証的調査研究の空白状態となっている死生の実態に迫ることを狙ったものである。

本共同研究のメンバーは、ここ10年の間、ケア実践の現場との対話を続けてきており、調査研究としては、在宅ホスピスケアを利用した遺族を対象に、2007年と2011年の2度、この主題について調査票調査を行った。

今回の共同研究の中心を占める遺族調査は、これら過去における調査の継続・拡大としての意味を持つ。在宅ホスピスケアに関してこれほど大規模かつ継続的な調査は他に存在しない。

またさらにその調査報告を、質的調査を組み合わせながら、より広く多元的な文脈の上に提示しようとした点も大きな特色である。

社会学や宗教学といった人文社会科学の文脈では、現代日本の死生観の現状に対する貴重な情報と洞察をもたらすことを、ケア実践の文脈では、現在の実態を踏まえた上で、しかも従来の医療・福祉の枠組みとは異なる観点から死生観の問題について示唆を与えることを、研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 予備的調査としての分担研究

本共同研究では、2006年・2011年に行った在宅ホスピス遺族に対する量的調査の結果を踏まえながら3種の分担研究を遂行し、そこから得られた洞察や論点を総合した上で在宅ホスピス遺族調査を設計・実施した。

各分担研究の内容は以下の通りである。

[分担研究1/患者家族やスタッフへのインタビューを含むフィールドワーク]在宅ホスピスケアや、その他の形態のホスピス・緩和ケアについて、患者家族やケアスタッフに対

する予備的調査を行った。とりわけ、ホスピス・緩和ケアにおける地域的条件の影響について着目した。

[分担研究2/思想史的・宗教史的考察]死生観に関する思想史的・宗教史的考察として、近世・近代における彼岸観念の思想史的展開を辿るとともに、「死」の病院への囲い込み状況をもたらした思想史的条件の探求を行った。

[分担研究3/海外事情の研究]ケア実践と死生観の関連について、とりわけ2007年・2011年調査において日本における存在が確かめられた終末期体験(end-of-life experiences)を主題とし、海外の事情や研究状況の整理を行った。

(2) 総合的研究としての遺族調査

上記分担研究の成果および、継続的に行うケア従事者との研究会から得られる洞察を反映させて、在宅ホスピスケアを利用した患者遺族に対する調査票調査を行った。

その際、重点化を図った質問項目は以下の通りである。(a) 各種の終末期体験に関する質問項目、(b) 現代における死生観の実態を窺うための自由記述式の質問項目、(c) 在宅療養選択に関わる希望や不安感の詳細を検証するための質問項目、(d) ケア実践との関連における家族ニーズの詳細を析出するための質問項目。

4. 研究成果

分担研究を集約して設計を行った調査票調査では、宮城県・福島県における在宅ホスピス診療所6カ所の利用者2223名に依頼状を送付して、663通の回答が得られた。その分析から、在宅療養時の患者や家族の不安感やニーズの詳細とともに、宗教的関心に経済的・社会的関心が絡み合った死生観の具体相が明らかにされた。その成果は、各種論文や学会発表の形で公表するとともに、『2015年実施在宅ホスピス遺族調査報告書』として冊子にまとめた。

重点化した質問項目ごとには、以下のような洞察が得られた。

(a) 終末期体験に関して、特に終末期覚醒や終末期寛解と呼ばれる出来事について20~30%ほどにあったとの報告が得られた。これは国際的にもまれな、日本では初めての量的データとなる。また、諸種の終末期体験の報告には強い正の相関があり、これらの観察-報告が患者と家族との関係性の中で成立していることが窺われた。

(b) 自由記述式回答から窺われた死生観の実態については、宗教的な関心が社会的な関心や経済的な関心と切り離せないかたちで結びついていることが判明した。こうした事情が、家族の死に関する観念と、将来における自分自身の死に関する観念との間にギャップを生んでいる要因となっていること

が窺われた。

(c) 在宅療養選択に関わる希望や不安感や、
(d) ケア実践と関連した家族ニーズの詳細
についての調査結果からも、この領域でスピ
リチュアルなニーズと呼ばれる問題と、介護
負担や療養場所、ケアサービスの選択といっ
た問題が絡み合っていることが示唆された。

これらの遺族に対する質問紙調査の結果
は、これまで実証的な研究が乏しかった、現
代日本における死生の実態を記述するもの
としての意味を持っている。加えて、ケア実
践との関わりでは、従来スピリチュアルケア
やグリーフケアといった一般的な枠組みの
中で語られがちであった問題領域について、
日本や各地域に独特な社会的条件および文
化的条件という要因を考慮し、死をめぐるケ
ア実践に組み込むことの意義を、具体的なか
たちで示すものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

[雑誌論文](計9件)

諸岡 了介、死と迷惑、宗教と社会、査読
有、23巻、2017、印刷中

相澤 出、藤本 穰彦、諸岡 了介、田代 志
門、自宅での療養はなぜ中断されたのか、
島根大学社会福祉論集、査読無、6巻、2017、
33-44
<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/38605>

板倉 有紀、田代 志門、家族ニーズから
みた在宅緩和ケアの課題、島根大学社会福
祉論集、査読無、6巻、2017、45-58
<http://ir.lib.shimane-u.ac.jp/38606>

相澤 出、医療過疎地域における特別養護
老人ホームの看取りのケア、社会学研究、
査読有、99巻、2017、85-107

相澤 出、医療過疎地域における特別養護
老人ホームでの看取りをめぐる困難、社会
学年報、査読有、45巻、2016、33-49

伊藤 嘉高、相澤 出、超高齢がん患者の
生と死、Cancer Board Square、査読無、2
巻2号、2016、249-254

桐原 健真、The Birth of a Myth: Civil
War and Sacrifice in Early Meiji Japan、
Anthropoetics、査読無、22巻1号、2016、
1

相澤 出、患者と家族のナラティブ(物語)
を聞き取る、比較文化研究、査読無、26
巻、2016、35-48

田代 志門、死にゆく人々へのケアはどう

変わったか、保健医療社会学論集、査読無、
26巻2号、2015、21-30

[学会発表](計8件)

諸岡 了介、在宅ホスピス遺族調査の結果
から、第19回日本在宅ホスピス協会全国
大会、2016年10月1日、芙蓉閣(宮城県
大崎市)

相澤 出、ショートステイの活用から見
える医療過疎地域における地域包括ケアシ
ステムの生成、第63回東北社会学会大会、
2016年7月31日、青森県観光物産館アス
パム(青森県青森市)

板倉 有紀、田代 志門、遺族ケアへのニ
ーズに関する探索的な検討、第42回日本
保健医療社会学学会大会、2016年5月14日、
追手門学院大学(大阪府茨木市)

相澤 出、看取りの場としてのショートス
テイ、第62回東北社会学会大会、2015年
7月19日、東北大学(宮城県仙台市)

桐原 健真、日本近代の死生観:「お迎え」
は来るのか?、NPO法人想像文化研究組織
カレッジICI、2015年7月11日、甲南大
学(兵庫県神戸市)

田代 志門、死にゆく人へのケアはどう変
わったか、第41回日本保健医療社会学会、
2015年5月16日、首都大学東京(東京都
八王子市)

板倉 有紀、田代 志門、家族ニーズから
みた在宅緩和ケア、第41回日本保健医療
社会学会、2015年5月16日、首都大学東
京(東京都八王子市)

諸岡 了介、「ホスピスの世俗化」言説と
その背景、日本宗教学会第73回学術大会、
2014年9月13日、同志社大学(京都府京
都市)

[図書](計5件)

相澤 出、田代 志門、藤本 穰彦、板倉 有
紀、諸岡 了介、河原正典、2015年実施在
宅ホスピス遺族調査報告書、2017、70

諸岡 了介、相澤 出、南山堂、認知症ケ
アの倫理と法、松田純他編、2017、46-47、
121-122

田代 志門、世界思想社、死にゆく過程を
生きる 終末期がん患者の経験の社会学、
2016、264

相澤 出、世界思想社、苦悩とケアの人類
学、2015、194-225

田代 志門、勁草書房、テキスト臨床死生学、2014、33-43

6. 研究組織

(1) 研究代表者

諸岡 了介 (MOROOKA, Ryosuke)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：90466516

(2) 研究分担者

相澤 出 (AIZAWA, Izuru)
医療法人社団岡部医院研究所・調査研究部・研究員
研究者番号：40712229

田代 志門 (TASHIRO, Shimon)
国立研究開発法人国立がん研究センター・研究支援センター・室長
研究者番号：50548550

桐原 健真 (KIRIHARA, Kenshin)
金城学院大学・文学部・教授
研究者番号：70396414

藤本 穰彦 (FUJIMOTO, Tokihiko)
静岡大学・農学部・准教授
研究者番号：90555575

(3) 研究協力者

板倉 有紀 (ITAKURA, Yuki)
日本学術振興会・特別研究員
研究者番号：70732353

河原 正典 (KAWAHARA, Masanori)
医療法人社団岡部医院研究所・診療部・医師
研究者番号：70711373